

第一〇五回 大蔵会 開会挨拶「利他行について」

真宗文化研究所名誉所長

一 郷正道

こんにちは。ご紹介に預かりました一郷正道と申します。師走に入りまして、何かと慌ただしい中、この大蔵会にご参集くださいましてご苦労さまでございます。

この、今回一〇五回目になりますが「京都大蔵会」と言いますのは、もうご案内のように京都佛教各宗の学校連合会が大正天皇即位の礼を記念する事業の一つとして企画され、それで大正四年、一九一五年の秋に第一回が開催されました、今日まで継続しているわけでございます。京都大蔵会に先んじて実は東京大蔵会というものが、行われたのですが、それはその前年、大正三年の一九一四年に開催されました。同じ「大蔵会」と称しながら、その趣旨・目的は若干異なっていたようです。東京大蔵会の方は、経典翻訳や研究、出版に貢献された方々を顕彰するものであったのに対しまして、この京都大蔵会は経典や仏像自体を供養し、もって仏教への啓蒙理解を促進することを目的としていたようであります。

京都大蔵会は、大蔵経や仏像自体を供養することが原点になっておりましたから、「大蔵会」の基本プログラ

ムは、まず法会を執行し、その後で講演がなされるという構成になっていました。まさにその伝統を受け継いで、今日の「大蔵会」が開かれているわけであります。「大蔵会」の際に数多くの貴重な典籍類が出品されましたので、高度な学術的なものでもあったようであります。

ただ昭和の後半になりますと、この京都大蔵会の目的にも変化が見られるようになりました。

すなわち、仏教文化財の展覧を通じてですね、文化財に対する啓蒙と保護の運動を勧めて、加えて初心者のために仏教精神の高揚に努める、それが「大蔵会」の目的になり現在に至っているわけでございます。

そこで展示されました宝物類というのは各宗派が秘蔵するものも含め、普段は見ることができない非常に貴重なものが多く、仏教の啓発伝道を目的として社会への貢献は大なるものがあつたようであります。

仏教の教えは当然のことながら、実践をともしなうものでなければなりません。その実践が、具体的には社会貢献という形をとって、大蔵会の歴史を担ってきたように思えます。

実践の具体策であります社会貢献は、仏教の教えからすれば利他行であり、慈悲の実践であつたと言えましよう。

慈悲のはたらきの具体的な例として、今日の会場校であります京都光華女子大学の看護学科について少しばかり紹介させていただきたいと思ひます。

本学がこの看護学科を設立いたしましたのは二〇一一年、平成二十三年のことでありますので、もう十一年の歴史を刻んだことになりました。

現在、看護学科が、全国で二七〇校余りに存在するようでございます。設立にあたりまして本学は「仏教看護」を標榜しました。今でも仏教の精神に基づく看護教育が行われているのは、実は本学だけではないかと思つ

ているわけです。

仏教看護を謳っておりますから、その看護学科の授業科目には、「仏教看護論」あるいは「ターミナルケア」といった授業がふくまれております。その「仏教看護論」では主に、生命科学だとか、命の問題、仏教思想から見た人間、看護と仏教についての講義がなされております。「ターミナルケア」の授業では、僧侶である講師が臨床で関わりあつた実体験の具体例が講義されております。

このような講義を必須で受講した学生さんにどんな看護師になつてほしいか、と申しますと、まずは人間の死にしっかりと対峙できる人、また、明日の命もわからない患者さんがそこに、目の前にいらつしやるわけでありますから、そういうときには手を握りしめ、さすつてあげながら、ひたすら患者さんの気持ちを傾聴できる人、そんな看護師さんを本学の看護学科は送り出した、と思つているところであります。

そのような看護師さんは他者への優しさ、思いやりを身につけた人でありますから、仏教的にはまさに慈悲の精神を身につけた人といつてもいいと思います。

慈悲と言えば、仏教は釈尊以来、実は慈悲の精神を訴求してきた宗教だと言つて良いと思います。

まず釈尊は初転法輪において、自らの悟りの内容である縁起説を苦悩する人々を解放するためにお説きになりました。これもまさに縁起の理論を語つてくださったわけですが、これこそまさに慈悲の精神そのものであると言つていいと思います。

それから紀元二世紀頃、南インドに在世された龍樹（ナーガールジュナ）は、次のような詩頌で釈尊を敬礼しておられます。

不滅にして不生、不断にして不常、不一にして不異、不来にして不去、戲論寂滅にして吉祥なる縁起をお説きになった、説法者中の最高の説法者である仏陀に敬礼いたします。(『中論』帰敬偈) 桂・五島訳 p.9

これは龍樹の名著である『中論』の帰敬偈に、このように語られているわけでございます。それでそのレジュームにご覧のようにですね、お釈迦さんと言う方は、その縁起の理論に目覚めて、ブツダ・覚者になられたわけでありましたが、龍樹は、縁起の理を悟った仏陀ではなくて、その縁起の理論をお説きになったブツダに帰依しているわけです。悟りを開かれた後、沈黙を経て、苦悩する人々を苦から解放せんとして、説法に踏み切られた、そういうブツダに龍樹は帰依していらっしやるわけです。

龍樹は次のようなことも語っておられます。

〔人々に対する〕憐愍の情から、一切の「悪しき」見解を断じるために、「縁起という」正法を説かれたガウタマ(＝仏陀)に、私は帰依いたします。(『中論』XXVII 30) 桂・五島訳 p.113

というようにですね、憐愍の情から縁起説をお説きになったという釈尊、ブツダは、まさに慈悲の精神を体现された方であったと言っていると思います。

さらに、中道について見ていきましょう。まず、ブツダ・釈尊は初転法輪においては「苦・楽の二辺を離れた中道」をお説きになったことをご承知の通りです。

龍樹もまた「有無の二辺を離れた中道」をお説きになりました。それを語るのが『中論』第15章第7偈であ

ります。

存在するもの（有）と存在しないもの（無）とをよく知る世尊は、「カーティヤヤーナへの教誡」の中で、「何かが存在する」ということと「何かが存在しない」ということ、そのいずれも否定された。（『中論』XXV 7）桂・五島訳 p.57

これが龍樹の言葉ではありますが、まさにここにですね、中道という言葉の内容が示されているわけでございます。これはまさにこの有・無という実在論、それを否定する言葉として『中論』では述べられているわけです。しかしですね、中道は龍樹によって次のようにも説かれております。

縁起なるもの、それを我々は空性と言う。それ（甲）は「何かを」因としての施設（因施設）である。同じそれ（乙）が中道である。（『中論』XXIV 18）桂・五島訳 p.177

この和訳で「それ」という言葉を入れて、「甲」「乙」というようにしてありますけれども、これは実はサンスクリットの代名詞の「एतत्」のことで、文法的には「空性」を指すともとれますし、「縁起」を指すともとれます。

ここに「中道」という言葉が出ておりますが、実は龍樹の主著であります『中論』において「中道」という言葉が出てくるのはただ一回、この第24章の第18偈だけにおいてです。

それ(甲)∴空性 「縁起∥空性、空性∥因施設、空性∥中道」
それ(乙)∴縁起 「縁起∥空性、縁起∥因施設、縁起∥中道」

このように等式でまとめられますが、釈尊がお説きになった「縁起」の理論、それは、私、龍樹の主張する空性に他ならないこと、そして、それ「空性」は「因施設」と言われますが、内容的には、いかなるものであっても、何かを因・素材として施設されるのであって、実体的なものではなく、言語的に表示される概念ではないものであります。

そういうことを「中道」というのであると、言うことをここで語っているわけでありませう。しかもその「中道」は、実は釈尊が「カーティヤヤーナへの教誡」というお経のなかで、「両極端を離れた中道」としてお説きになっていることでもあります。

したがって、私、龍樹の主張する「空性」というものは、内容的には縁起のことであって因施設と表現されるものであり、実は釈尊によって「中道」と説かれた「仏説」に他ならないと、宣言していると思えます。

ですからこの「縁起」という理論も「説かれたもの」、「中道」ということも「説かれたもの」、すべて仏説であるということが、龍樹の「中道」についての理解であったといえると思えます。

「中道」も仏説でありますから、それはまさに慈悲の精神が具体的に示されたものだと言っているんじゃないかと思えます。『中論』XXIV.18偈に関する上記のごとき理解は、夙に山口益博士が空性・空用・空義という空の三態(三相)をもって述べておられます(『仏教学序説』pp.139-155)。「空」を三態で理解することに依って、

空の思想が虚無論でないことを明言するものであったとされます（山口上掲 p.142）。

この「中道」についての議論は八世紀に在りし、瑜伽行中観派の学匠として、師のシャーンタラクシタと共に活躍したカマラシーラにも継承され、慈悲の重要性が強調されていることを若干見てみたいと思います。

カマラシーラは『修習次第』「後篇」の結論部で次のように述べます。まず「仏位 (buddhata) の証得を希求している人は、まず中道に専心努力すべきである」と述べた上で次のような三つの詩頌で「中道」を語っております。

① 「清浄にして無比の（中）道を明らかにして、私が得た福德、その（福德）によって、生きとし生ける者が、中道を得た者となりますように。」

② 「妬みの垢を取り除いた賢者たちは、大海が水で「満たされることがない」ように、諸々の功德で満足はしない。がちようが水中でミルクを「選別して」喜んで飲むように、「賢者は」吟味して諸善説を受持する。」

③ 「それゆえ、覚者 (buddha) たちは、辺見に陥って混乱した心を取り除いている。（たとえ）愚者からであったとしても、善説はすべて受持されるべきである。」（一郷・小澤・太田訳 p.128）

「中篇」では、次のような「三句の法門」が引用されます。これを引用したあとで②③①の順序でこれら三詩頌を挙げています。「一切智者のその智は、慈悲を根本とし、菩提心を原因とし、方便を究極としている」。これら三詩頌は、覚者とはいかなる存在であり、善説とは中道であり、一切衆生がその中道に善説を身につけた者にな

ることを念じていることを語るものであると言えましょう。すなわち、覚者は善説と非善説との選別ができ、辺見に陥っていない存在であります。善説 (subhastita) は辺見に陥っていないもの、正に中道であり、それは、たとえ愚者からのものであってもよく吟味して受持されるべきものとされます。専心努力すべき中道は、具体的に善説を受持することであり、それが仏位証得につながる、というわけであります。これら三詩頌を「中篇」「後篇」の結論部に置き「中道」を述べるもの、とカマラシーラは理解しており、その「中道」について整理しておきましょう。

(1) 中道とは善説であるという。この理解は、龍樹が中道を有・無の二辺を離れることだけでなく、中道＝仏説と理解しその点を重視していたことと軌を一にしているといえましょう。

善説、「善く説かれたもの」とは慈悲の精神の具体的な形態であり、方便に他なりません。中道＝善説＝慈悲＝方便という等式が成り立ちます。

ここに、カマラシーラが「中篇」の結論部で『大日経』「三句の法門」を引用する理由が判明します。すなわち、「一切智の智は方便を究極とする」と語られており、一切智の智は方便すなわち慈悲によって完成する、と述べているからです。

(2) そして、「中道」はその善説を受持することであり、その善説がすべての有情によって獲得されることが念じられている、ということは、中道は、カマラシーラにとって有情利益の利他行を語る教説であったといえましょう。

(3) カマラシーラが中道＝善説と言って、龍樹のように中道＝仏説とは言っていない点に注意したいと思えます。

「善説」といえば、ブッダを始め賢者がお説きになったものと理解するのが一般的でしょう。しかし、カマラシーラは、「愚者のこと」も吟味したうえで受持するよう述べています。ここにカマラシーラが「善説」の内容を拡大して理解していることが窺えるし、カマラシーラ自身が学者にとどまらず立派な教学者、仏教者であったことを示していると言えましょう。

ということとは「善説」すなわち慈悲というものは、いたるところに、誰に対しても開示されているということ。中道、善説すなわち慈悲の精神はすでに開示されており、それを我々が身につけることが念ぜられているわけです。しかし残念ながら、我々はその慈悲の普遍性に気づいていない、ということに他なりません。

要は、私たちが謙虚になつてそれに気づき、感謝の念を捧げられるかどうか、実は今われわれに問われていることではなからうかと思えてなりません。

最後に、アティシヤ (Atiṣa, 982-1054) についても言及しておきたいのですが、アティシヤという学者は十一世紀の方です。インドから仏教が追放されてしまうその直前に存在した方でありますけれども、アティシヤは、カマラシーラの思想の影響下にあつたということが今は理解されるようになっております。そして、アティシヤの主著である『菩提道灯論』に注釈を与えたパンチェン・ラマ一世は、「三句の法門」を「大乘の道」を語るものだと理解しております (望月 p.221)。カマラシーラが「三句の法門」を引用して中道を語っていたことは、先に述べましたが、パンチェン・ラマはそれを「大乘の道」を語るものと理解しているわけでありまして、この「三句の法門」がインドの後期の仏教史において重要な教証であつたと言えるとおもいます。

現在の世相を鑑みるに、果てしない欲望の暗闇に気づかず、あまりにも自己中心主義が跋扈する世の中、時代になつていくように思えてなりません。

優しさ、他者への思いやりを内容とする仏教の慈悲の精神、利他行を顧みることが必要であると私は考えている次第でございます。

以上、この第一〇五回の大蔵会にあたり、一言挨拶といたします。どうもご清聴ありがとうございました。

参考書

- 京都仏教各宗学校連合会『五十年の歩み 続』二〇一六
- 荃津智子「仏教精神に基づく仏教看護とは」『真宗文化 第二十九号』京都光華女子大学真宗文化研究所 二〇二〇
- 桂・五島訳・桂紹隆・五島清隆『龍樹』根本中頌』春秋社 二〇一六
- 山口益他『仏教学序説』平楽寺書店 一九六一
- 一郷・小澤・太田訳・一郷正道・小澤千晶・太田菫子『瑜伽行中観派の修道論の解明——『修習次第』の研究——』二〇〇八
- 年度(二〇一〇年度科学研究費補助金基盤研究(C)) 成果報告書 二〇一一
- 望月・望月海慧訳『全訳 アティシヤ 菩提道灯論』起心書房 二〇一五